

登録/更新年月日：平成21年4月27日

佐野市の市民参画による生涯学習推進 (さののしみんさんかくによるしょうがいぐくしゅうすいしん)

citizen participation for promotion of lifelong learning in Sano City

キーワード：市民参画の実質化、市民参画における「私らしさ」、佐野市生涯学習推進基本構想、佐野市生涯学習推進協議会、ワークショップスタイルの諸会議への導入

西村美東士 (にしむらみとし)

1. 佐野市における市民参画の特徴

佐野市の生涯学習推進の特徴は、市民の「私らしさ」追求を基点とした参画と、社会形成としてのまちづくりとが連続体として進められているところにある。そこでの市民参画には、生涯学習活動の「個人主導」としての側面と、まちづくり活動の「社会参画」としての側面を同時に見ることができる。

【参画の種類と連鎖】

佐野市の生涯学習推進は、いわゆる「平成の大合併」をまたいで進められてきた(表1「年表：佐野市生涯学習推進の経緯」)。そこには、(1)市民委員としての推進計画策定への参画、(2)学習指導者としての推進事業への参画、(3)学習者としての生涯学習活動への参画の3種類の市民参画を見出すことができる。これらの参画は、連鎖しながら、「生涯学習のまち」を形成してきた。

【「私らしさ」のまちに 咲かせます」参画における個人主導と社会参画の視点】

平成18(2006)年10月、佐野市生涯学習推進協議会は、佐野市生涯学習推進基本構想策定に向け、標題の中間答申を佐野市長に提出した(表2「佐野市生涯学習推進協議会中間答申の構成」)。

答申は、「まちづくりへの参画(2)田中正造などの郷土の偉人の整理と提示」において、「生涯学習活動は、個人の必要のために行われ、その結果、個人が充実する」と生涯学習の個人主導の側面を強調した上で、「そのことによって、私らしさも、より確かなものになり、これをもとに「わがまち、わが国、わが地球」のために求められる社会参画を推進するよう提唱している。このように「個人が必要とするもの」と「社会が必要とするもの」を結び付ける重要な要素として「郷土愛」や「社会正義」を掲げた中間答申の特徴は、平成19(2007)年3月の最終答申を経て、平成20(2008)年3月の「佐野市生涯学習推進基本構想・基本計画」(表3「佐野市生涯学習推進基本構想・基本計画の構成」)に継承された。

【「楽習と参画のまち佐野」都市宣言における個人主導と社会参画の視点】

平成19(2007)年12月、佐野市は、同協議会の起草をもとに、市議会の議決を経て、生涯学習都市宣言(表4「宣言文の構成」)を行った。

宣言文冒頭の「私たち佐野市民は、ひとりひとりが楽習をとおして個人として深まり、」は、個人主導の「楽しい」学習による個の深まりを表わしている。

続く「その個性を生かし、協働して佐野のまちづくりに参画します。」は、学習によって深まった個によるまちづくり参画の意義を訴えている。同協議会は、その参画の範疇について、「挨拶から始まる社会形成」という視点から、幅広く、すべての市民が現に行っていることとしてとらえている。これを、「個人主導」としての生涯学習活動と、「社会参画」としてのまちづくり活動との連結ととらえることができる。

次の「たがいに自分らしさを認めあい、支えあい、はぐみあう仲間をつくります。まちづくりへの参画のなかで、自分らしさを佐野のまちに咲かせます。」は、個の深まりが、支持的風土(図1「支持的風土と防衛的風土」、Gibb, C.A., 1969)の集団において、他者と関わることによってより深まるとともに、「私らしさ」へのニーズを充足させることを表わしている。

同宣言は、市民委員のワークショップスタイル上の観点に基づき、「ふるさと」「環境・安全」「子育て」の3領域について、楽習と参画による生涯学習のまちづくり像を示したものである。添付資料：佐野市における市民参画の特徴

参考文献

・西村美東士「まちづくり推進における青少年と親の社会化支援方策—佐野市生涯学習推進基本構想作成過程からの検討」、聖徳大学生涯学習研究所紀要『生涯学習研究』5号、pp.17-37、2007年3月

[<トップページへ戻る](#)

『生涯学習研究 e 事典』の使用にあたっては、必ず使用許諾条件をご参照ください。

登録/更新年月日:平成21年4月27日

佐野市の市民参画による生涯学習推進(さののしみんさんかくによるしょうがいがくしゅうすいしん)

citizen participation for promotion of lifelong learning in Sano City

キーワード: 市民参画の実質化、市民参画における「私らしさ」、佐野市生涯学習推進基本構想、佐野市生涯学習推進協議会、ワークショップスタイルの諸会議への導入
西村美東士(にしむらみとし)

2. ワークショップスタイルの導入による市民参画の実質化

【会議形式の意義と限界】

会議形式の検討においては、各委員が一定時間、全員に意見を述べるができるため、生産的な意見をそのまま文案作成に取り入れることができる。反面、「委員が会議に慣れるまでに時間がかかる」、「協働とは異なる非生産的な構えがある委員の場合、会議では態度変容は期待できない」、「意見が対立した場合、合意形成が困難」、「行政にとって都合な意見を生産的に対処できない」、「実質の伴わない意見であっても、それがいわゆる正論として受け止める雰囲気になった場合、対論があっても出づらいつい」などの問題がある。その場合は、最終的には委員長や担当職員による文章化作業に委ねることになり、市民参画が形式化する恐れがある。

【「生涯学習都市宣言」起草文案作成過程における市民参画の方法】

今後の生涯学習やまちづくりの推進において、多様な市民が参画するようになった場合、メンバー全員が出席して、議論を重ねて合意形成に至るという従来の活動形態は困難になってくる。そこで、佐野市では、原案作成者(西村美東士委員)が3領域を示し(表5「宣言文原案作成者素案の構成」)、それぞれのID(推進イメージ)要素のリスト化のためにクドパス(表6「クドパスチャートの作り方」)を適用した。その結果、各領域チームはメンバーの自由なIDを効率的にリスト化することができた(図2「ふるさとチーム作成生涯学習推進ID要素クドパスチャート」)。これにより、生涯学習推進のためのID表現について、レベルアップした発想を発見することができた。また、クドパスチャートに裏打ちされたID表現をもとに、共通の構造的理解に基づく文章化作業を行うことができた。

原案作成者は、各チームのID要素作成成果と文章化成果及び後日提出された「個人文章」から抽出されるキーワードを、3領域と協議会答申の主要な柱である「学習」「交流」「参画」のマトリックスによって分類して示した(表7「キーワードの分類」)。その分類をもとに、各チームのほぼすべての文章化成果を含み、また、ほとんどのキーワードの趣旨を組み込んだ原案を作成した。協議会は、これを、行政側の事務局を入れて会議形式で検討し、精査して宣言文案を作成した。文案の中に盛り込みきれなかった文章や、表しきれなかった内容については、「宣言文の補足説明」として裏面に掲載することとした。

【ワークショップのもつ参画実質化効果】

ワークショップスタイルを導入した宣言文の作成過程は、次の点で、市民参画を実質化するための効果があったといえる。

- (1) ワークショップによって生涯学習推進イメージが共有でき、委員の協働作業としての文章化の成果を得ることができた。
- (2) その成果と原案修正結果をフォローアップするための会議を開き、ワークショップに欠席した委員も含めて「原案修正」に関わる合意形成を図ることができた。
- (3) 原案作成者は、フォローアップで形成された合意のほか、前年度からの協議会での検討結果も踏まえ、委員一人一人の「背後の想い」まで推察しながら、それを宣言文に反映させることができた。さらに、「宣言文」の本体部分には質や量の面からなじまない事項については、ワークショップ成果や説明資料の添付によって実質的な反映を可能にした。 添付資料: ワークショップスタイルの導入による市民参画の実質化

参考文献

- ・西村美東士「市民参画を実質化する生涯学習推進の方法論(序論)」、日本生涯教育学会、『日本生涯教育学会論集』29号、pp.13-22、2008年7月
- ・森和夫『人材育成の見える化』、JIPMソリューション、2008年8月

[<トップページへ戻る](#)

『生涯学習研究 e 事典』の使用にあたっては、必ず使用許諾条件をご参照ください。

登録/更新年月日：平成21年4月27日

佐野市の市民参画による生涯学習推進（さののしみんさんかくによるしょうがいがくしゅうすいしん）

citizen participation for promotion of lifelong learning in Sano City

キーワード：市民参画の実質化、市民参画における「私らしさ」、佐野市生涯学習推進基本構想、佐野市生涯学習推進協議会、ワークショップスタイルの諸会議への導入

西村美東士（にしむらみとし）

3. 市民参画における「私らしさ」の個人的側面と社会的側面

本項では、佐野市生涯学習推進基本構想が求める「私らしさ」と市民参画について、同構想の重点プロジェクト「子育てまちづくり」（図3「子育てまちづくり支援事業の概要」）を例にとり、子育ての個人的側面と社会的側面に着目して解説する（図4「子育ての個人的側面と社会的側面」）。

【個人完結型の子育てと社会開放型の子育て】

各地の「子育てまちづくり」推進においては、「子育て支援」のまちづくりに偏っていて、「子育て活動」によるまちづくりへのアプローチが少なかった。そのため、個人完結型の側面に偏りがちで、子育て自体の社会開放型の側面を見落としかちであったといえる。このままでは、子育ての「社会化」の名の下に、母親の就労支援等が先行し、結果として、子育ての「個人化」傾向と、「あなた任せ」、「専門家任せ」の無責任な子育ての拡大が危惧される。

佐野市基本構想は、保育園、幼稚園、学校、児童館、学童保育所などの関連機関が、網羅的に、保護者会、PTA、子育てサークル、青少年育成活動などの参画のための「子育てまちづくり拠点」として機能するように求めている。これは、子育て支援機関が、個人完結型の子育てとともに、親の参画による社会開放型の子育てを支援することを意味する。

【個人完結と社会開放の関係及び揺れ】

これまで、一般的に、親の個人化傾向が問題視され、社会化について、方法論を持たない期待が繰り返されてきた。これに対して、佐野市では、わが子をよく見る「私らしい子育て」と、社会とともに歩む「このまちらしい子育て」を、等価として統合的にとらえたものと設定して取り組んでいる（図5「私らしい子育てとこのまちらしい子育ての統合」）。

「子育てまちづくり」への参画の中で、親は、個人完結と社会開放の両者の子育て活動のあいだを揺れ動く。従来の子育て研究においては、結果を見たいがために、いずれかの方向からしか見てこなかった。だが、参画する個人にとっては、「私らしい子育て」と「このまちらしい子育て」はボーダーレスな関係であり、個人主導と社会参画は無意識のうちに統合されているととらえる方が自然であろう。

この揺れの中で公私の子育て活動は充実する。その展望をもたずに、子育ての個人化傾向のマイナス面を一方的に責める視点は、個人と社会の断絶を深めることになりかねない。

【私らしさと市民参画の螺旋的発展】

とくに専業主婦は、子育ての中で、「自分のための時間をもちたい」と切望することが多い。これを単なるわがままや逃避ととらえるのではなく、生涯学習活動及び参画活動の契機ととらえる必要がある。

自我が確立するに従って、個人完結と社会開放の揺れの幅は大きくなる。「私らしい子育て」と「このまちらしい子育て」の両者の気づきの振幅が大きいほど、親の人生のなかで、子育ての時期が貴重な体験となる。まちづくりに参画する親のこれまでの発言からは、自己の子育ての捉え直しによる子育てまちづくりへの新たな視点の提起が多く観察された。このように、佐野市生涯学習推進における「子育てまちづくり」は、親の自己形成にとっては、私らしさと市民参画の間を循環しながら螺旋的に発展する契機となっている。

市民参画研究においては、自己形成と社会形成の一体的視点から、この螺旋の上げ幅や速度を高めるための方法論を構築することが期待される。 添付資料：市民参画における「私らしさ」の個人的側面と社会的側面

参考文献

・西村美東士「参画型子育てまちづくり活動から見た生涯学習推進の展望—源流から市場へ：子育ての源流からまち、社会、市場への展開」、聖徳大学生涯学習研究所紀要『生涯学習研究』7号、pp.1-10、2009年3月

[＜トップページへ戻る＞](#)

『生涯学習研究 e 事典』の使用にあたっては、必ず使用許諾条件をご参照ください。